

日常を届けたい

白井市立野津中学校 三年 倉野 真衣

人並みの人生。あたたかいごはんがある。友達と遊ぶ。中学生らしく反抗期を過ごす。何気なく空を見上げる…。そんな日常を送っている中、私は横田めぐみさんを知った。

初めて知ったのは小学六年生、道徳の授業の時だった。アニメ「めぐみ」を見た。その時の私は「こんなこともあるんだ。」くらいに軽く受け流し、深く考えることはなかった。

二度目に「めぐみ」を見たのは中学校二年生になってから。最初は「これ見たことあるな。」と思いながら真面目に見る姿勢に欠けていた。しかし、一度目に見た時と私の心の反応は全く違った。いつの間にかアニメに引き込まれていき、苦しい気持ちになっていたのだ。

私は、自分の他人に対する共感能力は著しく低いと思っていた。みんながニュースを見ていてかわいそうだと言つても特に自分は関心をもたない事も多い。でもアニメを見る中で、めぐみさんやめぐみさんの家族の気持ちに共感できている自分がいた。驚いた。同時にその驚きが「もつと知りたい。」という意欲に変わっていた。拉致されためぐみさんを始めとした被害者の方々、そしてその帰りを待つたくさんの人たち。この人々は今までどれだけ苦しい思いでこんなにも長い時間を生きてきたのか。それを確かめるため、私は拉致問題中学生サミットに参加した。

サミットでは横田めぐみさんの弟、横田拓也さんの講話があった。めぐみさんが拉致されてから四十八年が経過しているという事実を改めて確認した。私は考えられないくらいの長い時間だ。また、めぐみさんの帰りを待つ中、強く望んでいた再会を果たせずに亡くなってしまった父、滋さんの思いも伝えられた。そんな講話の中で一番心に残ったのは母、早紀江さんの夢、「草原に寝転がって青空を見ながら話がしたい。」というもの。これは、私たちなら簡単にできること。けれどそんな簡単なことさえできない人がいる。とても悲しい現実だと思つた。絶対にこのまま終わらせてはいけない問題だと痛感した。

私が嫌な事が重なつて気持ちが沈んでいた時、空を見る余裕などなかつた。どれだけ前に進もうとしてもずっと立ち止まつてゐるような気持ちだつた。その後、心が晴れた時にふと見上げた空は、今まで私が知つてゐた空ではなかつた。信じられないくらい美しい眺めだつた。本当に感動した。この景色をめぐみさんと家族の皆さんで一緒に見てもらいたい。空の美しさを改めて知つてもらいたい。

拉致問題の解決は決して簡単なことではない。その中で私たちにできること。それは、この問題について考え続けること。問題を風化させないようにたくさん的人に伝え続けること。被害者の方々の一時も早い帰国を願い続けること…。日常の中に青い空がないすべての人々に、この空の美しさを届けたい。